

四条木屋町/四条小橋



前回は四条寺町の御旅町の写真絵葉書を紹介しました。今回は四条通を少し東に戻って、高瀬川四条に架かる四条小橋の絵葉書を探りあげてみます。

Web版の本稿との連動コラム、図書館長のおもちゃ箱「四条通今昔散歩」（以下、web版コラム）第3、第4回で、明治期から昭和初期の四条大橋について触れました（<https://www.kufs.ac.jp/toshokan/director/director3.html> <https://www.kufs.ac.jp/toshokan/director/director4.html>）。

本来ならば、web版コラムの連載の続きに書きたいところですが、掲載可能な写真数の都合で、ちょっと木屋町四条まで戻ることになりました。

冒頭の写真は、橋の東詰、木屋町通付近から西向きに四条通りを撮影したものです。白黒の写真を印刷した後、手作業で部分的に彩色を施しています。

そもそも四条通の、とくに御旅町より東は昔の京都を囲む御土居の外側にあたり、路幅は狭く、高瀬川や賀茂川にはまともな橋がない時代が長く続きました。幕末頃の高瀬川には、賀茂川に架かっていた四条橋と同様の木造橋が架かっていたようですが、四条橋が鉄橋に架け替えられたのと同様、明治7年（1874）に四条小橋も架け替えられたのです。構造は“西洋造石橋”と言うことですが、残念ながら絵葉書からは橋の側面形が判りません。幸いなことに京都府立総合資料館のwebページ（<https://artsandculture.google.com/asset/shijo-small-bridge/OgH50KCpR8fhiQ?hl=ja>）に小橋を高瀬川上流側から捉えた写真を掲載してくれています。それを見ると、高

瀬舟の行き交う川に橋脚を建てることを避け、橋の両端からそれぞれ3分の1あたりまで、兩岸から持送り式に斜めに橋脚を渡して支えています。高欄はL字断面の鉄材をボルトで接合して構成したものであることもわかります。高欄デザインは四条鉄橋と共通性を持たせたようです（四条鉄橋についてはweb版コラム第3回「四条鉄橋のはなし」に写真絵葉書を紹介しています）。

親柱も石造で、凝った擬宝珠が載っています。

明治45年（1912）の道路拡幅工事に伴い、この橋も架け直されることになります。

架け替えに際し、旧橋の石材は売りに出されました。そのうち、親柱の一本が、最近まで祇園町（花見小路二筋南、



甲部歌舞練場西向い）の料亭壱兵衛の入り口わきに立っていましたが、店舗外装改装の際に撤去されたようです。他の部材がどうなったか、おそらく石材として転用され、それと知られることもないまま、何処かでひっそりと頑張っていることでしょう。

現在の四条小橋の東詰め南側には、オリジナルを簡略に模したやや小ぶ

りな石柱が建っています（石造親柱現状、筆者撮影）。

さて、ではいつものように写真に写っているものの分析に取り掛かりましょう。

四条小橋が手彩色の絵葉書になっているということは、この場所が観光の対象になっていたことを意味します。四条通は今より狭いですが、多様な店が軒を連ねる繁華街の様子を写真は伝えています。画面手前右に大きく目を引く看板は、web版コラム第3回「四条鉄橋のはなし」でも触れた、高橋盛大堂薬局（現、盛大堂製薬）の清快丸。左には新京極蛸薬師にあった洋傘と帽子の店の広告看板。「正價堂」とか「正直堂」といった名称はこの当時よく見かけるもので、いわゆる掛け値なし、値引きもなしの価格のお店、というほどの意味でしょう。さらに、左手前には洋服調進所の名を掲げる店もあり、明治も後半になると洋装文化が京都にも定着してきていることがわかります。右手前から二本目の電柱の後ろには藤井大丸の“あかがね御殿”が見えています（“あかがね御殿” 本誌BIBLIOTHECA 237号掲載「図書館長のおもちゃ箱6」参照）。

京都市電四条線の四条西洞院四条小橋間が開通するのは明治45年（1912）6月のことですが、この絵葉書の写真が撮影されたのは市電敷設以前の事です。石造の橋の前後は砂利を突き固めた程度の地道でした。橋の東詰（手前）、親柱のすぐ下に左右に延びる平行線が2本見えています。路面電車の線路です。ここに路線を開通させたのは京都電気鉄道株式会社（京電）でした。京電木屋町線、七条停車場（踏切北）―木屋町二条間の開通は明治28年（1895）。ここには「四条小橋」という電停もおかれます。電停といってもことさらに乗降のためのプラットフォームがあるわけでもなく、あるいは四条小橋の親柱そのものが停留所の目印になっていたのかもしれません。

写真では紹介しませんが、この絵葉書の宛名面は通信文面積が下3分の1、上端には「きかは便郵」と濁点なしの右書き表示があり、明治40年（1907）―大正6年（1917）の郵便法にのっとっています。

一方、四条小橋に関係する京都市電路線を見てみると、明治45年（1912）6月に、四条西洞院―四条小橋間、元号が大正と改まった同じ年の暮れには四条小橋―祇園石段下が開通し、これにより四条大宮―祇園石段下に至る市電四条線が全線開通となります（市電路線敷設と四条通の拡幅についてはweb版コラム2回「西楼門と石段下」参照）。

以上の手掛かりから、この絵葉書の撮影時期を1907年から1912年の間に絞ることができます。

実は、四条小橋を主題とした手彩色写真絵葉書が、少なくとももう一つあります。

子細に検討しても、カメラを冒頭に紹介した写真絵葉書と全く同じ位置に置いて撮影されたものとは思えません。人物の入れ替わりや立ち位置の変化はありますが、右



の“うどんそば”看板とその横を通る荷車の位置からすると、両者はほぼ同じ時間に、同じ撮影者が、同じカメラを使って相次いで撮影したもののようです。写真が撮影され、絵葉書として印刷され彩色されてからほどない時期にこの橋が消滅することを思うと、この場所を絵葉書として残した理由には深いものがあるのかもしれないと思ってしまう。筆者の知る四条小橋そのものを題材とした写真絵葉書はこの2種だけです。その種類数は、繰り返し数十種類の絵葉書が作成された四条鉄橋や四条アーチ橋には比ぶべくもありません。

明治から大正へと元号が変わる前後の時期は、京都の町なかの変化が急を告げた時期でもありました。実は、意図してかせざるか、そういう時期に、たとえば、堀川の流路整備によって消える直前の「芹根の水」を主題とした手彩色写真絵葉書や、京阪電車京都線が五条から三条に延伸される直前の賀茂川宮川町を望む風景を主題にしたものなどが存在します（芹根の水については拙稿「古都の変貌 写真絵葉書「京都堀川」―古写真絵葉書から見る景観変化の解説に関する研究：名どころから観光名所へ」京都外国語大学COSMICA 41号を、宮川町を望む絵葉書については「古都の変貌―景観変化の解説への古写真絵葉書の応用に関する研究序章―」COSMICA 39号に詳しく書いています）。

この絵葉書が版行され、元号が大正へと変わって8年後（1920）には、人の移動や物資の輸送に300年間にわたって活躍した高瀬舟による舟運が廃止され、川面から姿を消してゆきます。

高瀬川そのものも、大正8年（1919）の京都市都市計画で、保健衛生面の問題と道路拡幅のために一旦は暗渠化が決定されました。これに反対する住民による景観保全運動が起きた結果、高瀬川は今も繁華な街に沿うように流れ、四条小橋は今も“橋”として存続しているのです。

ひぐち じょう（教授・日本文化史）